

六ノ五、勸学記

原典 解脱上人小章集 日本大藏經第六十四卷所収

解説 貞慶が十カ条の清規を示して行文平易に興福寺の学侶に對して心得べきことを述べたものである。第一に昼夜一二時間の時間割を示し、他の九ヶ条では穩健着実に當時の僧界の必要なことをあげている（東大寺辞典）。

原文

勸学記

一云学徒  
教誡

夫以日月易移昼夜莫徒。名利難棄修学何怠。今生又非幾來世尤可恐。若非三宝之冥助者。爭離三途之苦域。且為行為法。且為孝為身。宜嗜修学止不用矣。

一不可空昼六時事

辰巳学問午勤行未学問申外典世酉等戌念誦亥学問子休息丑睡眠寅学問卯学問

一不可怠修学二門事

受難受之生値難値之法。尤可学。誰不勇乎。就中顧身見人。其勤疎而恣遂先賢之古跡。其功少而恨期過分之榮望。冥顯之責有恐、誑詐之過難遁。何時冥加盡。何庭胎耻辱。訪上代見近來。不積涯分之微功。無達始終之前途。因果之理必然之習也。欣名求利。立身交人。尤励愚性可嗜修学。雖無遇当折之学道。可致充日之稽古。況所作受前学問為左。天罰有恐。冥加如何。利根聰敏之輩。猶不学無所知遇。淺智之性豈不励有所知乎。非馮性、非募功。只猛惑之甚也。付中為身有得分。為親成孝行。旁可當可学。空不可送時日矣

一常親近修学仁不可昵不用之輩事。

不用之道多篇。学問之妨非一。所謂武芸博奕之輩。藍突姪憎之類。愛酒宴好二雜談等也。武芸者不凶失身。博奕者損財妨学。藍突之仁者穢淨行人。姪憎者催放逸之思。如此輩者親無益肥多失。可云皆修学之妨現当之敵也。嗜学積功者。事便談法門。詞端教性相之間。自然成才学。始終為大功。殊得其意可有捨矣。詩詞管絃者雖為芸能之片端。不如内典之稽古。偷雖令存知。好不可賞翫矣。

一世路之營者修学之妨也。不顧涯分莫好過差。只以学生可立衣文矣。

一貴所之近習者疎学之根元也。縱雖有渡世之便。不可成勇進之思矣

一、決択之庭。聽聞之砌、拋万事可差出。且為會資威儀。且為身成才学。興隆也得分也。必臨学場可聽聞也。恒例之大會希代之診事者。無故障者可見物。為寺社之榮仕。興隆之一分故也。於自餘見物者。縱雖有逸興。豈可令停止。為不用之基稽古之障故也。

一窮屈之時。徒然之折者。睡居学窓雖令休息。立入他人之部屋。莫吐無益之雜言。談他過失之源。自他疎散之基故也。縱雖令會合。不可送數尅。姪事親談。女会沙汰。殊以禁制。

只可令談決挾之法則。出仕之禮儀。交衆之故実消息書矣。

一 仏法之結縁者出離之勝因也。必以今生之学功可為來世之資糧矣。

一 不可好姪事酒宴事

姪酒増盛謂隆之根取也。為境界傾一期。為酒宴振財産人皆為嗚呼。世举成謗難。輕賤之心因之發。疎学之聞從之來。為慳慙失身命。依醉狂成闕諍總有失無德。殊於酒宴者。畜匪身之費。頗為人之勞。下戸之類清貧之輩者。烈筵雖示入興之体退座頗歎難堪之役。一端者為逸興。雖有近習之仁。始終者顧德失。多止追從之儀。不如服藥酒療病氣。停大飲營修学。姪事者先業之力。凡夫之習也。雖不能制禁。旁可有斟酌。為境界為我身。殊存折中之儀。可止偏執之思歟。醉醒夢驚後悔非一。尤可存知矣。垂髮之仁同宿之條。更不能奔走。雖有無力之次第難玄由緒。初心淺位之間者。固令辞退不可承諾矣。

一 不嗜修学而不可立威勢事

内徳備外儀調。不好有威勢。無所□闕威儀。雖無親昵傍輩振威勢。等倫雖輕賤。学功積。名譽高。依自己有勤必学。一寺靡徳。万人傾首歟。而功淺身輕□或招集勇敢之者。或語寄權威之仁之條。當時有傍終無益歟。不如励螢雪之懃□一修学之輩天神定擁護。悉地速成就歟。

読み下し文

夫れ以つて日月移ろい易く、昼夜徒にする莫かれ。名利棄て難くも修学何ぞ怠らん。今生に又非幾(道に外れた行いの兆し)あらば来世尤も恐るべし。若し三宝の冥助非ずば、争か三途の苦域を離れんや。且つ行が為、法が為、且つ孝が為、身が為、宜しく修学を嗜み不用を止むべし。

一 昼夜六時の事を空しくするべからず。

辰巳、学問、

午、勤行、

未、学問、

申、外典世事等、

酉、勤行念誦、

戌亥、学問、

子丑、休息、睡眠

寅卯、学問

一 修学二門の事怠るべからず。

受け難き生を受け、値い難き法に値すべく、尤<sup>とりわ</sup>け学ぶべし。誰か勇あらずや。就中、身を顧りみ、人を見るに、其の勤め疎にして恣<sup>ほし</sup>にす。先賢の古跡に遂<sup>すす</sup>むも、其の功少なし。恨むらくは過分の榮望を期す。冥顯(見聞できないものと見聞できるもの)の責め恐れ有り。誑詐(だますこと)の過<sup>あやま</sup>ち遁<sup>いづ</sup>れ難し。何の時か冥加盡き、何の庭にか耻辱を胎むや。上代(大

昔を訪ね、近來を見るも、涯分（身分相応の程度）の微功すら積らず。始終（始めから終わりまで）、前途に達すること無し。因果の理、必然の習い也。名を欣び、利を求め、身を立て人と交わるは尤も愚性を励ます。修学を嗜むべし。折に当りての学道に遇うこと無しと雖ども、日に充ちる稽古を致すべし。況んや所作（為すべき事）の前を受けての学問、左（不都合）と為す、天罰の恐れ有り。冥加（神仏の加護）は如何。利根（賢い性質）聰敏の輩も猶学ばずば（冥加に）知遇する所無し。淺智の性は豈勵ずして知る所有りや。性に馮るに非ず、功を募るに非ず。只猛惑の甚しき也。中に付け、身が為に得分を有し、親が為、孝行を成す。旁營むべし、学ぶべし。空しく時日を送るべからず。

一 常に修学の仁に親近し、不用の輩に昵かざるべからざる事。

不用の道、篇（詩歌や文章）に多し。学問の妨げ一に非ず。所謂武芸博奕の輩、藍突姪憎の類、酒宴を愛し雑談を好むに等しき也。武芸は凶らずして身を失し、博奕は財を損し学を妨げ、藍突の仁は浄行の人を穢し、姪憎は放逸の思いを催す。此の如きの輩は親みて益無く、昵くは失多し。皆修学の妨げと云うべく、現当の敵也。学を嗜み功を積むは、事便ち法門を談じ、詞の端に性相を教うるの間、自然才学を成す。始終大功が為め、殊に其意を得て用捨有るべし。詩譚管絃は芸能の片端を為すと雖も内典の稽古に如ず。偷て存知せしむると雖ども好んで賞翫すべからず。

一 世路の営みは修学の妨げ也。涯分（分際）を顧みず、過差（程度を過すこと）を好む莫れ。只学生を以て衣文を立つべし。

一 貴所の近習は疎学の根元也。縦へ渡世の便有ると雖も勇進の思い成すべからず。

一 決択（選び決めること）の庭、聴聞の砌、万事を抛ち差し出さずべし。且つ会が為め威儀を資け、且つ身が為め才学を成すは興隆也、得分也。必ず学場に臨んでは聴聞す可き也。恒例の大会希代の診事は、故障無くば見物すべき者なり。寺社の栄仕を為すは、興隆の一分の故也。自餘見物に於いては、縦へ逸興（世俗を離れた風流の趣）有りと雖ども、堅く停止せしむ可し。不用の基が為めに、稽古に障と為るが故也。

一 窮屈の時、徒然の折は学窓に睡居し、休息せしむと雖ども、他人の部屋に立入り、無益の雑言を吐く莫れ。談他過失の源、自他疎散の基いの故也。縦へ会合せしむと雖ども、数尅を送るべからず。姪事親談、女会の沙汰、殊に以って禁制す。只決択の法則、出仕の礼儀、交衆の故実、消息書（手紙）を談ぜしむべし。

一 仏法の結縁は出離（煩惱を絶つこと）の勝因也。必ず今生の学功を以って、來世の資糧と為す可し。

一 姪事酒宴を好むべからざる事

姪酒の増盛は謂る隆の根取也。境界（因縁の理によって各人が受ける境遇）が為に一期（人の一生）を傾け、酒宴が為に財産を振る。人皆嗚呼（鳥のように泣き叫ぶこと）を為し、世は挙げて謗難を成す。輕賤の心、之に因り発し、疎学の聞、之に従り來る。慳慳（両字とも物惜しみ

することゝが為に身命を失ない、酔狂に依り鬪諍を成す。総て失有りて徳無し。殊に酒宴に於てはただ番に身の費にあら匪ず。頗る人の勞と為す。下戸の類、清貧の輩は筵(酒宴の席)に烈し興に入るの体を示すと雖ども、座を退きては頗る堪え難きの役を歎く。一端は逸興が為、近習の仁有ると雖ども、始終は徳失を顧み、多くは追従の儀を止む。薬酒を服し病気を療し大飲を停め、修学を営むにしかず。姪事は先業の力、凡夫の習也。制禁すること能わずと雖も、旁た斟酌(手加減すること)有るべし。境界(地位)が為、我身が為、殊に折中(程よい状態にしておく)の儀存し、偏執の思い止む可し、酔醒夢驚、後悔一に非ず。尤も存知すべし。垂髮(幼児)の仁、同宿の條、更に奔走(いろいろ世話をする)する能わず。力無き次第有ると雖も由緒、まじ玄い難し。初心淺位の間は固く辞退せしめ、承諾すべからず。

一 修学を嗜まずして威勢を立つべからずの事

内に徳を備え、外に儀を調う。威勢有るを好まず。所□無く威儀に闕く。親昵無しと雖も、傍輩威勢を振う。等倫(同輩)軽賤と雖ども、学功を積まば名誉高し。自己に必学の勤め有るに依りて、一寺、徳を靡き万人傾首(仰ぎ靡くこと)するか。而して功淺身軽□、或いは勇敢の者を招集し、或いは權威の仁に語を寄せるの条、当時傍(たよること)有りて、終に益無し。蛩雪の勲□を励むるにしかず。修学の輩に天神は擁護(やくそく)を定す。

悉地(真言の秘法を修めて自在神力の妙果を得ること)速やかに成就せんか。